

2017
おもろ
チャレンジ

パラオ・コロール市街地の今昔比較

文学部 3年

栢野 ななせ

パラオ

2017年8月27日-

2017年9月17日



渡航概要と内容

私は、大洋州の赤道ほど近くの島国・パラオ共和国の唯一の市街地であるコロールに三週間滞在し、調査を行いました。調査タイトルには市街地の今昔比較と銘打っていましたが、具体的には、もともと現地人の暮らしていた街に多くの日本人が入植してきたことで、そこにどのような影響が生じていたのかを地理的視点から調査する（住み分けが起こっていたのか、現地人の居住エリアに変化が生じていたのか等）ということを最大のテーマとしていました。調査に当たっては、国立博物館やパラオ短期大学、公立の図書館の関連資料を閲覧したり、かつての街の様子を知る年配の方に聞き取りをしたり、さらに、コロール市街地内に位置するパラオ政府の公共事業・産業・商業省の土地測量局（Bureau of Land and Surveys）にて、コロール島の全範囲内について、日本の委任統治下にあった1923年から1927年にかけて南洋庁により作成された土地台帳、また現在の地籍図やその二つを照合させるためのデータの取得を行ったりしました（帰国後、データを分析中です）。また、一般に認識されているパラオの親日感情の真偽やその由来についても関心を持ったため、自分の中でサブテーマとして設定し、聞き取り調査を行うなどしました。こちらに関しては定量的なデータはなくれっきとした調査とは言い難いものの、自分なりの見解は得ることができました。また、初日に出会った一人のパラオ人から芋づる式のように多くの現地人と知り合い、調査期間を通して彼らと生活レベルでの交流をすることができたことで、「現地の人々に寄り添った滞在にしたい」という当初に掲げた目標の達成に近づくことができました。

文化に関して言うと、日本統治時代の影響もあり、例えば食に関しては日本的な要素がかなり色濃く残っていましたし、またおっとりした保守的な国民性であるところも似通っているなど、共通性を感じる面もままありました。ただし、時間に対する感覚が日本とはずいぶん違うことは日々実感していました。パラオ人は腕時計をめったにせず、人に会うときにも直前に電話するか

いきなり出向くという場合が多いらしく、アポイントを取っていた時刻から1時間待たされるなどはざらにあることでした。それを見越してあまり予定を窮屈に組まないよう意識するなどはしましたが、時間に関してのみならず総じてへたにピリピリせず郷に入ってすぐ郷に従ったため、苦勞という程のものを味わうこともありませんでした。

トラブルとまではいかないものの、初めてひとりで海外に行った自分にとって想定していた以上に日本人女性一人という状況は声をかけられる機会が多く、うかうかしていてもあわや危ない目に合うところ、ということもありました。親切に協力の申し出をされたときなど、この機会を逃したくないという思いとリスク管理との線引きを難しく感じていましたが、どんなに信頼を深めた人に対してであっても常に心の片隅に危機感を忘れずに持つようにしていました。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

まずは、渡航期間を通じてさまざまな出会いを経験し、そのどれもに助けられたからこそ成果を得たうえで無事帰国できたと実感しています。その過程では現地の方々の親切さに感動し感謝の念を抱くとともに、自分に潜在する可能性を垣間見ることができたと感じています。私は普段人に対して割と控えめな性格ではありますが、渡航中、ここで手詰まりかと思われたり少し億劫に感じたりしたあらゆる場面で「これを逃せばもう同じような機会はないのかもしれないのだから」と一歩踏み出した行動が出来ました。そのおかげで人脈や行動の選択肢が広がり充実した日々につながったことは、私にとって新鮮で嬉しい体験でした。

また、自己紹介の際や人に協力を仰ぐ場合などに Kyoto University という文言を使うたび、これほどにもお得に働いてくれるのかと実感していました。日本人や現地人でも京大を知っている人に対しては印籠のごとく効果を発揮しこちらのお願いを快く聞いていただける場合が多いし、京大を知らない現地人にも「かつての日本の首都名+大学」と説明すると由緒があると判断されやすく、おかげで歓迎してもらえると場面が多くありました。普段はなかなか実感できない、フィールドに出かけているからこそ噛みしめる京大生としての特典の有難さでした。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

まず、調査で取得してきたデータを使った分析を当面は進めていき、うまくいけば卒業論文の題材へと発展させていきたいと考えています。出国前には、今回の調査テーマを扱うのはこの機会限りにして、調査のノウハウだけでも卒論に活かせばいいかという考えでいましたが、調査や分析を進めるうちにどんどん興味深さが増しました。金銭面から海外での卒論調査を避けたいと考えていたところもあったのですが、今はもっとこのテーマで深くやりたいという思いがその考えを上回っています。

また、2の項目でも言及しましたが、「一度きり、せつかくの機会だから」という思いから能動的に動くことができ、その結果たくさんの幸運に恵まれて充実した調査につながったことは、自分にとって意義深い発見となりました。「旅の恥はかき捨て」的スタンスだったからできただけだ、といって済ませるのではなくて、普段の学生生活においてこそ今回学んだチャレンジ精神

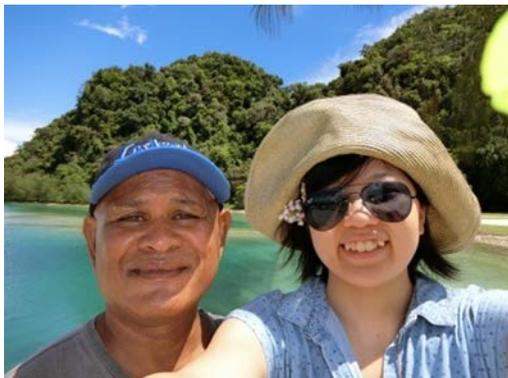
を持ち続けていきたいと考えています。



パラオ短期大学で資料収集



日本語の話せる年輩の方へ聞き取り



お世話になった現地の方と



南電跡の隣に住むパラオ人



年に一度の女性会議に参加



素麺と米はパラオの‘お袋の味’

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*宿泊費

*交通費

*食費

*調査経費

*海外旅行保険

*その他雑費 など